

平成二十八年度 入学試験問題

国語（理系）

100点満点

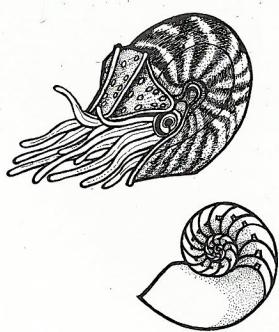
※配点は、学生募集要項に記載のとおり。※

（注意）

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに9ページ、解答冊子は表紙のほかに16ページある（うち11ページは下書き用）。
- 三、問題は全部で3題ある（1ページから9ページ）。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはつきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰つてもよいが、解答冊子は持ち帰つてはならない。

一 次の文を読んで、後の間に答えよ。(四〇点)

P・G・K・カーンとS・M・ポンピアは一九七八年に発表した論文の中で、現存種のオウムガイの殻の外面に見える細かい成長線の数を数え、二枚の隔壁の間に挟まれた小室一つ一つに平均約三十本の細線が含まれること、その数はどの殻を見てもまた同じ殻のどの小室を見てもほとんど変わらないことを報告している。深海に棲むオウムガイは夜になると海面に浮かび上がる。太陽の周期に合わせて浮沈するオウムガイの殻の細線は、一日ごとの成長の記録だと考えられるだろう。隔壁は月の周期に同調して作られるのだと仮定すれば、毎月三十本ということで数はぴったりと合うわけだ。カーンとポンピアは、年代にして四億二千万年前から二千五百万年前にわたる二十五個のオウムガイ類の化石について同じ調査を行った結果、一小室あたりの細線数が、現存のものでは三十本、もつとも新しい化石で約二十五本、最古の化石ではわずか九本と、年代の古いものほど規則的に少なくなることを明らかにした。すなわち、四億二千万年前の地球では、ひと月はたった九日間しか持つていなかつたのである。これは当然のことであり、その理由を説明するのは簡単だ。すでに天文学と地球物理学が明らかにしているように、^{ちようしきせき}潮汐摩擦によつて自転に制動のかかる地球は減速するにつれて角運動量を失つてゆくが、月は、その地球が失つた分の運動量を受け取ることによって、地球からの距離をだんだん大きくしながらその周囲を公転してゆくことになるからである。言い換えれば、月は少しずつ地球から遠ざかりつつある。地球の自転が今よりもっと速く一日が二十一時間しかなかつた四億二千万年前に、月は今よりずっと地球に近いところにあり、わずか九太陽日で地球の周囲を公転していたのだ。カーンとポンピアは幾つかの方程式を解いた結果、当時の月は、地球からの現在の距離のたつた五分の二強という近いところを回っていたはずだと結論しているといふ。古代のオウムガイはすでに原始的な眼球を備えていた。彼らはその眼で、夜ごと深海から浮かび上がつてきては、今われわれが見ている月とは比べものにならないほど巨大な月を眺め



参考 オウムガイと殻の切断図

ていたのである。

オウムガイの殻に残つた細線の数が意味するものに關して、^{*}グールド自身はカーンとポンピアの仮説にいくぶんかのけねんを呈しており、それはまことにもつともな点を衝いていいるのだが、九本が正確に九日間に對応していると断言するのは行き過ぎであるにせよ、少なくとも彼らの推論の大まかな方向づけはそのまま諾つてよいもののように思われる。いや正直に言えば、太古の海で巨大な月を見つめているオウムガイに思いを致すのはあまりにも魅力的なので、グールドの懷疑論には耳を貸したくないという氣持が強いのだ。

われわれもまた、時として、明るく輝いている黄色い月が思いもかけぬ大きさで地平線近くにかかっているのにふと気づいて驚くことがある。だが、四億二千万年前の月の大きさはそんなものではなかつただろう。それは、中天まで昇つてきてもなお巨大な姿^(イ)を圧し、その堂々たる輝きで満天に鏤^(もじは)められた星々の煌めきもかすんでしまうほどだつたことだらう。昔の光とは、ここで、今の光とはまつたく違うもののことである。それは、今の光からの類推によつてイメージを作ることができるものではないはずだ。わたしは今、それを想像してみようとは思はない。想像などという行為がいつたい何になるだろう。あの風鈴やあの蠟燭の炎もまた、わたしは想像したわけではなかつた。わたしはそれを見たのであり、現に見ているのである。他方、四億二千万年前の月光の場合、それはわたし自身の肉体の延長をはるかに越えた昔の光であり、わたしはそれを一度も見たことがないしこれからも見られようはずはない。もちろん何とかそれを想像してみよう、脳裡に思い描いてみようと試みることはできる。たとえば世界の終末の光景を憑かれたように詩に詠つた前世紀のフランス詩人ル・コント・ド・リールにとつての文学創造とはそうしたことだつた。だが想像力が豊富であると貧弱であるとを問わず、想像するとはそれ 자체、精神の営為として基本的に貧しいものしかありえない営みだと思う。しばしば詩人の富として語られることがある想像力といふものの徳について、わたしはかなり懷疑的である。^(ウ)えそらごととしか見えぬ弱々しい想像もあるうしはくしんの力強さを帶びた想像もあるだろうが、いずれにせよ想像されたものは、結局想像されたものでしかないからである。いかなる場合でも想像は現実には及びようがない。

四億二千万年前の月はたしかに地球の海を照らし出していた。オウムガイたちは波間に揺られながらその光を見つめていた。これはたしかにあつたことである。今われわれが豊かだつたり貧しかつたりする想像力をこうして構成しようと努める、独創的だつたり凡庸だつたりするイメージとは無関係に存在している、確固とした事実である。昔の光は、昔、たしかにあつた。この「あつた」の重さにはいかなる想像力も追いつきようがない。この光を古生代のオウムガイの眼が見つめていたという過去の現実は、化石の殻の小室ごとに刻まれた九本の成長線がはつきり証し立てている。これら九本の微細な線の前ではいかなる人工的なイメージも無力である。われわれが今見ているのとはまったく違う月、中天を圧して輝きわたつていてる巨大な月を、オウムガイたちはたしかに見つめていた。夜ごと日ごと浮沈を続けながらそれを見つめていた生物が現実に生きていたのだ。わたしはそれを見ることができないが、このオウムガイたちはそれをたしかに見ていたのであり、のみならず自分がその光を見ていたという事実を自分自身の軀に刻印し、四億二千万年後の今日に残しているのである。彼らがみずから肉体に残つた痕跡の形でいわばわれわれに遺贈してくれたこの証言、これ以上物質的ならざるはないこの証言を通じて、われわれはそうした光が存在したことを知ることができる。(C)わたしのが感動するのはここのことだ。それ見ることはできないが、かつて在りし日にそれを見ていた者を見ることはできる、——彼がたしかにそれを見ていたということを証明する物質的な証拠を見ることができ、つまりはそれによってその光を知ることはできるということ。四億二千万年前の波間にそうした月光がそそいでいたことを、今わたしは知っているということ。知ることは、ここで、想像することをはるかに越えて豊かで本質的な営みとしてあると言うべきである。見ようとしても見られないものを想像するというのはしばしば安っぽい文学的感傷でしかない。だが、いかなる想像も追いつきようのないものを知ることができるというのは、これはまた何と人を興奮させる出来事であることか。

(松浦寿輝『青天有月』より。参考図は出題者による)

注(*)

P・G・K・カーンとS・M・ポンピアとともにアメリカの科学者。二人の論文「オウムガイ類の成長周期と地球一月系の力学的時間発展」は、『ネイチャ』二七五号（一九七八年一〇月一九日号）に掲載された。

角運動量＝回転運動の特徴を表す基本量。地球一月系の角運動量は常に一定に保たれている。

グールド＝スティーヴン・ジェイ・グールド（一九四一—二〇〇一）。アメリカの古生物学者、科学史家。筆者は、グールドの著書『パンダの親指』（原著は一九八〇年刊）に拠りながら、この文を書いている。

あの風鈴やあの蠟燭の炎＝少年の頃に筆者が見たり聞いたりした風鈴や蠟燭の炎を指している。
ルコント・ド・リール＝十九世紀のフランスの高踏派の詩人、劇作家。

問一 傍線部（ア）～（オ）のひらがなを漢字に改めよ。

問二 傍線部（A）の内容を説明せよ。

問三 傍線部（B）について、筆者はなぜこのように思うのか、説明せよ。

問四 傍線部（C）はどういうことか、説明せよ。

次は、主として中世のヨーロッパ社会でさまざまな情報がいかに伝達され、共有されたかを考察した文の一部である。これを読んで、後の間に答えよ。(三〇点)

マイクロフォンとスピーカーとによつて、人声を同時に多人数に伝達ができるようになるまえ、ひとはいつたいどうやつて意思をつうじあつていたのだろうか。軍隊のように、訓練された伝令が、部隊別に命令を下知できる場合は、まだよい。けれども、直接、肉声をもつて語りかける演説やら説教となるとどうだろう。はたして、発言の趣旨は正確につたえられたのか。
まして、バステイユ牢獄を襲撃する鳥合^(うごう)の衆となつては、暴動への意思確認が、正確におこなわれたとはかんがえにくい。

適切な文書による伝達が存在しなかつた中世の時代となれば、ますます絶望的だ。人びとは、不正確な理解にもとづき、むやみと感動したり、侮蔑を発したりしていことにならうか。職業的な通信役はたしかにいたから、組織にのつとつて行動する集団の場合はまだ事態は容易だとしても、中世に独特の群衆の場合には……。

だが、記録が証言しているところによれば、肉声による音声通信は、かなり効果的におこなわれたらしい。たとえば、皇帝が市民にむかつて重大な決断を告知するときには、どうも、仲介スピーカーがいたらしい。つまり、もとの声を復唱し、さらにつぎのスピーカーがひろめてゆく。いわば、扇形に声の通信が拡大してゆくわけだ。

けれども、直接の肉声告知のケースも多い。街頭に立つて、禁令を触れまわる役人がおり、かれらは大声で、市民たちに重大事項をのべてまわつた。いやそればかりか、キリスト教聖職者たちは、教会の内であれ野外であれ、さだめし低く思慮ぶかい声で、魂の内面を語りはじめたであろう。数百人の信徒たちは、ほとんど涙せんばかりに、聴きいっている。

想像するところ、かれら中世人たちは、いまのわたしたちは段違いの耳をもつていたようだ。そのころ、人間社会は音にみちた世界をいとなんていだ。中世都市の路上には、家畜の鳴声も子供たのはしゃぎ声も、乞食する訴え声も、そして、時をつげる鐘の音も。どれもが、雑然と空間をつたわつていつた。けれども、人びとは、その音と声のすべてを仔細に聞きわける能力をとぎすませていた。どんなに多数の音源があつても、⁽¹⁾ 雜音・騒音というべきものはありえなかつた。

私語する大衆、泣きむずかる赤児などまるで関知せぬがごとくに、かれらは説教師のことばを^{えら}拝びわけていた。音声ひとつひとつに意味がみちあふれていた時代、そのときこそ、音声の通信は機械的方法の^{たな}援けをうけずに、数百、数千人の耳をとらえたのであろう。

むろん、そのころ、情報を正確に蓄蔵し、空間と時間とをこえて伝達する手段は、ないわけではなかつた。たとえば、書物。西アジアやエジプトで発明された羊皮紙やパピルス紙は、しつかりとした文字を盛られて、重用された。活版印刷術が登場するまえとはいへ、専門の筆写生たちは、丁寧なペン使いで、写本を複製していった。軽量化されたこれらの「紙」は、運搬され、もしくは愛蔵されて、遠い場所、遠い時間のかなたに送達される。写本は通信手段として、かなり洗練された利器となつた。

もつとも、写本はただの通信手段ではない。中世写本には、しばしば、みごとな細密挿画がぐわえられた。^{*}イニシャル文字には、凝った装飾がつけられた。写本はそれ自体、ひとつの芸術品である。備忘録のように走り書きされた紙片とはちがつて、写本はモノとしての重みを兼備した財宝である。⁽²⁾美しさと便利さとは、分離できぬ一体となつていたのである。

そのころ、特別な知的能力をもつものは、みずからも著作を書いた。その著作は、さらに写本として複製されて、流通していくつた。けれども、このような顕著な思想伝達のほかに、もつと多くの通信が中世社会をとびかつたはずだ。おそらく、文字が使用される場合のほとんどは、著作ではなく、書簡であつただろう。

自分では満足に文字をつかいかねる王侯貴族たちは、祐筆をはべらせて、手紙をつづらせた。かつての時代の手紙を、いま目前にすると、場と時とを異にする相手にたいして、意を正確につたえようとする、つよい通信欲求が、うかびあがつてくる。

写本と書簡のよう、文字ばかりが通信用の記号ではなかつた。絵がある。ときに羊皮紙のうえに、またときには、教会堂の壁のうえに、絵は物語を表現した。近代の絵画のように、絵そのものが対象を描写するということはまれだつた。絵には、明瞭な語りが秘められていた。絵画は鑑賞されるのではなく、解読されるものだつた。

あまりに稚拙な表現もあるが、しかしそれは画家の能力不足のゆえではない。⁽³⁾ 画家にとつての関心は、忠実な対象写影ではなく、記号としての物語表現に集中されていた。

(樺山紘一『情報の文化史』より)

注(*)

バステイユ牢獄＝パリにあつた監獄。民衆がこの監獄を襲つたことがフランス革命のきつかけとなつたとされる。

羊皮紙＝ヒツジなどの皮を薄くなめして文字や絵が描けるようにしたもの。

イニシャル文字＝段落の最初にある文字。中世の写本ではきわめて華麗な装飾を加えられる。

祐筆＝貴人に仕え、文書を書くことをつかさどつた人。

問一　傍線部(1)はどのようなことを言つているのか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどのようなことを言つているのか、説明せよ。

問三　傍線部(3)について、筆者はなぜこのように述べているのか、説明せよ。

白
紙

三

次の文は、狂言の教訓書の一部である。これを読んで、後の間に答えよ。(二〇〇点)

昔人の云く、^{ようづ}万のこと草を見るに、浅きに深きことあり。深きと思ふに浅きことあり。^{*}いづれも心をとめて見聞けば面白きことのみなり。業平の歌は心余りて言葉足らざと言へるにて知るべし。⁽¹⁾いづれ筆に及ばざること多し。心に入れてみるならば、言置きしことよりよきこともありぬべしや。

兵法の習ひに、大敵を小敵と心得、小敵を大敵と思ふべしとなり。その如く、この道も稽古を晴⁽²⁾_{はれ}とし、晴を稽古にすべしと言へること同じ。かりそめに稽古するとも、いかにも慎み、貴人高人の前と思ひ、うやまひて大事にすべし。さて舞台へ出では前の心を忘れ、やすくすべしとぞ。大敵ある者は彼に勝たんことを思ひ、嗜むものなれど、敵なき者は油断して必ず不嗜みになる。その時我を相手にして、我に勝たんことを思ふべし。⁽³⁾これむつかしき敵なり。君子はその独りを慎むとかや。必ずめやすき所にけがあり。油断^{がうてき}強敵也。

(『わらんべ草』より)

注(*)

業平の歌は心余りて言葉足らざと言へる。『古今和歌集』仮名序に、在原業平の歌を評して「その心余りて言葉足らざ」とあることをいう。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)(3)はどのようなことを言っているのか、それぞれ説明せよ。

問題は、このページで終わりである。